

飛鳥世一 短編連載小説

不定期更新
7 回更新

小説「七日 nanoka」

大衆小説なのか
純文小説なのか

「なのか」の物語りを
たった一人の貴方へ

群像劇なのだろうか
劇詩なのだろうか

詩なのだろうか
小説なのだろうか

私小説なのだろうか
独白型小説なのか



骸の原罪
とともに



時刻の
物語りを
紡ごう

目次

はじめに	1
prologue	
prologue	5
Day 1	
Day 1	13
Day 2	
Day 2	29
Day 3	
Day 3	43
Day 4	
Day 4	53
Day 5	
Day 5	63

はじめに

はじめには仕上がりを見た時点で書かせて頂きます。

なお、たしかここのシステムの関係から、更新をするとダウンロードしてくれた方には、自動的に新しい更新分が配信されるはずです。

宜しければ、ダウンロードしてお楽しみください。

飛鳥世一

舞 台 極寒の北海道、石狩、小樽、函館、青森、

時 代 昭和 52 年 2 月

登場人物

松本 悟 (14 歳) 松本 隆 (41 歳) 松本君代 (41 歳) 松本次郎 (12 歳)

西大寺 巖 (68 歳) 西大寺千代 (66 歳)

高橋峰子 (38 歳) 三島恭一 (52 歳)

キャバレーのボーイ、キャバレーの女 (自称 25 歳)

すし屋の大将、旅館の女将、港湾作業員

あらすじ

親が家賃の支払いのために除けておいた五万六千円が少年の手

に握りしめられていた。全財産だった。極寒の地、冬の北海道を舞台に紡がれる話は、文字通り雪景色をイメージさせる語りと共に進む。

ただ雪景色がさながら余白であるのか。塗り重ねられたホワイトであるのかは読み手次第。

行間に埋め込まれた詩編、時おり顔を覗かせるアトリビュート書き手が好むメタファの効かせ。

春まだ遠い北の地。鴉の哭く啾こえが物語のはじまりをつける。

飛鳥世一 作 新春一本目 小説『七日 (なのか)』連載開始

prologue

prologue

『闇夜に鴉は二度啼くって知ってるかい？……』
聞くとはなしに聴いていたラジオの深夜放送
澄んだ声から程遠く
寝物語からも程遠い
どこか遠くで聞いていた
鞆につめたセーター三枚
気に入ってたオニツカジャージで手がとまる
空席になった今宵弟の定位置
寝床に敷かれた布団に忍ばず
俺のお気に入り……おまえにやるよと
最後に鞆につめたのは
いつも一緒だった「こいつ」と撫ぜる
滑らかな裸体は冷たく白い
手に馴染んだそれは
ドラムスティック
あんたが捨てたこと
記憶の向こうに捨てたこと
恨んでいるだろう俺たちを
遠慮はいらなかったんだぜ
俺は……と呟く

あんたの失敗は家族を持ったこと 一時の感情に振り回され 浮ついた臍の下を てめ
えで御せなかったこと 音楽を捨てたこと
たったひとつ尊敬できるところだったのに

悟は鞆につめた荷物を眺めます
忘れ物は無いだろうか
忘れ物を気にする自分に気がつく
馬鹿なのか俺はと首を振ってみせました
旅に出るわけではありませんでした

何の中でもありません
ただ出たかった
あんた達とのこの暮し
明日は今よりましだと
明後日なんか知らないさ
「さようなら 探さないで」と手紙のこして

松本 悟 中二の冬 昭和五十二年二月 凍てつく夜のことでした。

母親の君代は既に仕事に出かけていました
いつも四時半には「はん場」の飯炊きに出掛けてゆきます
喰うに事欠く日々
永遠と終わりの見えない苦労の日々
「おふくろ」のことだけが気がかりだったようです
家賃の支払いにと除けておかれたお金の場所は知っていました
家出の軍資金にしようと考えていたようです
空腹を凌ぐための握り飯を二つ握りました
手には五万六千円が握られていました
「そろそろ出るか」 悟は既に大きくて小さな覚悟を決めていたようです



2022-07-10 (1) .png

明けきらぬ夜を背にして
一羽の鴉が宙(そら)舞います
「クウファ〜クウファ〜」と二度啼きました
背中を向けた住み慣れた貧乏住まい
心の中の燐りをもみ消すように雪を手にとると顔にこすりつけました
「前だけをみて、歩け俺」そう自分に語り掛けました
いつの間にか空が白みはじめています
月も朧に姿をかえました
雪原は蒼白くキラメキを放っていました
凍った空気が宙を舞い
顕した質量を持て余したように漂います

《「。」のついた文字列以外、地文、人称文の凡てが韻文詩。

文字列頭 母音律 あいうえお順
尚、次章次節より体裁はランダムとなります。》



少年の家出.jpg

Day 1

Day 1

悟の家出に最初に気がついたのは弟の次郎でした。

悟の机の上に書置きをみつけたのでした。

「さようなら 探さないで」書かれていたのはそれだけでした。

一瞬にして次郎の頭の中は真っ白です。

まるで吹雪の中を足の感覚だけを頼りに歩いているようでした。

【家出？ これは兄貴の家出？】

前の日の夕方から小学校の友人宅に泊まりに出かけていた次郎が帰宅したのは悟が家出をした日のお昼まえのこと。

両親はまだ不在。母は仕事に出ていました。

父は前の日から出張に出ておりこの日の夜に帰ってくる予定でした。

次郎は悟の身の回りの物で無くなっているものを探しました。

キルティングの冬物のダッフルコート。緑色のボストンバック。冬物スニーカー一足。ジープン 学生ズボン セーター。小説の本 文芸誌ノート数冊。そしてドラムスティック。

次郎は悟が持ち出したものを新聞折込のチラシの裏に書き出しました。

両親が居ぬ間の出来事。連絡の取り様もありませんでした。

出来ること。判ることだけを纏めたのでしよう。

次郎が自分の寢床に眼をやります。

妙に布団が膨れていることに気がつきます。

布団を捲ると悟のお気に入りのオニツカジャージが出てきました。

眼にも鮮やかなオレンジ色のジャージ。綺麗に畳まれてました。

それまでは驚きばかりが先行し悲しみを感ずる余裕もありませんでした。

ジャージを掻き抱くと次郎の眼からは涙が溢れ出てきました。

涙が伝う頬からは質量を感じさせる湯気が立ち上ります。

これが寒冷地の冬でもありました。

半信半疑。

兄貴が家出？

理由はなに？

ウソだろうと思いたかった

喧嘩になるなまた

親が帰ってこのこと知ったら喧嘩だろう

あゝもう嫌だ

兄ちゃん狡いよ

苦しいのは兄ちゃんだけじゃないのに

めんどくせなあ

逃亡コート着て逃げやがって

次郎は悟の残したオニツカジャージを身に纏ってみました。
大きかったようです。大きすぎました。腕は手首一つ半。足の長さは袴のようでした。着丈は冬物のヤッケほどもありました。

あのひと。こんなに大きかったんだ。
次郎はジャージを身に纏ったまま布団にもぐり込みました。
悟がアスパラの収穫期。
アルバイトをしながら買ったオニツカジャージ。
小学生だった次郎にはアルバイトのお声がかかりませんでした。

次郎は「出来ることは何もない」と泣きながら寝てしまいました。



弟の次郎が布団に入った頃。悟は列車の中から冬の海を眺めていました。風を受けた白波が噴火湾のゴロタ浜に広がります。
函館本線。札幌発函館行き。特急北斗の車内にありました。

【※この当時の札幌発函館行きは、小樽回りの函館本線と、千歳回りの室蘭本線の二系統があった。特急北斗は、小樽回り、室蘭回りの二系統運転だったはずです。後に特急

北斗は、室蘭回りに統合されました。札幌、千歳、苫小牧、室蘭経由、伊達をはじめとする太平洋沿岸域、噴火湾ライン、長万部、八雲、森を走り、進行方向左手には、内浦湾の穏やかな海を眺め、吹き飛ぶ以前の駒ヶ岳を望むことができました。悟が乗った特急北斗は小樽回りの山越えルート。小樽、余市、倶知安、ニセコ、そして長万部。即ち、長万部が室蘭ルートと小樽ルートの合流点だったようです。この当時の怪しげな記憶を手繰るのであれば、確か、札幌から函館まで四時間と少しの所要時間を必要としていたと記憶します。】

列車は雪深い倶知安からニセコを抜け長万部に到着していました。

ほとんど寝ることもなく朝を迎えた悟。

列車に乗り込むとすぐに眠りに堕ちていました。

「長万部え～長万部～」続いて聞こえてきたのは「カニめしい～カニ飯はいらんかえ～イカ飯にカニ飯～弁当にお茶あ」の声。

悟は財布から二千円を取り出すと窓を開け弁当売りと呼ばひ止めました。

「カニ飯いくらですか？……　そうですか、イカ飯は？……じゃあ、イカ飯とお茶を下さい。」

千円支払い、二百数十円のおつりでした。

【当時の国鉄運賃は特急自由席で札幌函館間で三千円を少し超えるぐらいだったと記憶しているのですが、残念ながら調べても出てこないなので概算で記させて頂くこととします。イカ飯が七百円ぐらい。お茶が八十円ぐらいでしたね。】

財布を開けて確かめる

イカ飯買って確かめる

抜き出すたび払うたびに確かめる

背中を流れる冷たい汗

これが俺の生命線

あといくら

命の長さと金の嵩

飢えを凌ぐか暖とるか

手前で勝手に飛び出して

おなじ現実突きつけられて

足掻く暮らしは追ってくる

死ぬまで続くと追ってくる

無計画だと詰 (なじ) ってみても

列車は急に

止まらない

どうやら悟も自分の無計画さに気付いたようです
貧乏暮らしは嫌でした。
それでも我慢ができなかったのかと問われれば「そうではない」というでしょう。
悟が最も我慢ができなかったこと。
それは「おふくろ」の働く姿を見続ける毎日。のべつ幕なしに働き続ける毎日。来る日も来る日も凍える朝も雨に打たれる朝も働き続ける毎日。
拳句が突然始まる怒鳴り合い。詰り合い。罵詈雑言の応酬の日々。不幸中の幸いでしょう。父親の隆は一滴も酒を飲めない下戸でした。酔って暴力を振るうということはありませんでした。それでも八つ当たりは子供たちに向きました。
離婚しないのが不思議でした。君代はことある毎に離婚を仄めかしていました。それでもいつも最後の最後には踏み止まっていたのです。



雪と列車.jpg

車窓を流れる景色がまたホワイトを強くしだしたようです。
枯れて撓んだ枝に留まる鴉が梢を揺らして飛び立ちました。
常緑樹は真白いハンチングをかぶった様に首を垂れます。

北海道でも太平洋側は比較的に雪は少ないところです。
同じ道南地方ではありながら日本海側の檜山地方は雪が多かったようです。

あゝそれにしても……
地方都市の雪景色と列車の相性
夫婦として長年連れ添った距離感を思わせます
列車は線路を走ります
それに纏わりつく風雪

眺めているだけで
涙を零すに苦労はありません
窓をうつ雪たち
真白い雪たち
誰もが思い出すであろう
…… あなた
悟も例外ではなかったようです

悟をのせた列車は大沼を過ぎていました。
悟は函館が近づく毎に自分の心臓が早鐘を打ち鳴らしていることに気がついていました。
「おふくろ達はまだ帰ってきてはいないだろう……はんかくさい。誰に叱られるわけでもないのに気にする必要があるものか。」
思い出すことが自分の決心を鈍らせるとでも感じていたようです。
悟は硬くなったイカ飯を頬張り冷たいお茶で流し込みました。
このときの悟は次の計画を立てていました。
「青函連絡船に乗って東京に向かおう」と。
初めて北海道を離れることへの緊張感。
如何やら胸の高鳴りは未知の世界の扉を開けることへの期待と恐れから来ていたようです……。



悟が家出 さとるがいえで
いったいどうして
嘘ようそあの子に限って家出など
ねえ悟かくれているなら出てきてよ
外に出て
空を見上げて
子を思う
遠き雲間に
面影映して
あゝこの冬の寒空の下
祈りとどけと膝をつく
苦しみとどけと雪溶かす
背中合わせに身をおきて
お前寒けりゃわたしも寒い
お前ひもじけりゃわたしもひもじい
お前泣くならわたしは哭く
お願いだから戻っておくれ
お願いだから生きておくれ
おねがいだから……

君代が帰って来たようです。
次郎から悟の家出の知らせを聞いたのでしょう。
裸足のまま降りしきる雪の中歩み出していました。
手には「さようなら 探さないで」と書かれた書置きを手にしたまま。
家の前、吹き溜まりとなった雪に突っ伏して哭いていました。
次郎は君代のコートとマフラーを手にとると君代に掛けてやりました。
「かあちゃん。風邪ひくから家に入りな……」

馬鹿野郎が
あんたまでが
泣かせやがって
なにもしない母ちゃんを
裸足で表に走らせて
赤く腫らした顔みて見ろ
兄貴あんたが泣かせたんだ

バカ兄貴……

次郎は君代の肩に手を置いたまま寒くて震えていたようです。
君代の泣く姿が堪えたのでしょう。堪らず次郎も泣いていました。

その日の夜のこと。
父親の隆が出張から戻ると両親二人は善後策の対応に追われていました。
「取り敢えず高橋先生に連絡をしよう」
高橋峰子は悟の担任教諭でした。
隆が電話で仔細を告げると電話を置くが早いかな悟の家を訪ねてきました。学年主任であり生活指導教諭であるベテランの三島恭一を伴い。
隆と君代は学校での暮らしぶりと思い当たることについて質問したようです。時折喧嘩をすることぐらいしか思い当たらず先生達も策無しの様子。高橋峰子は君代の手を取り一緒に泣いていました。
「おかあさん、悟は大丈夫です。必ずあの子は帰って来ます」と。

「警察への搜索願や出奔の届け出はしたのですか？」
現実的な動きの確認をしたのは三島恭一でした。
この時点ではまだ警察への届け出をしていなかった松本家。
三島の確認にようやく思い至ったようです。

「ではどうでしょう。お父さんと私と警察に行き、家出人届と搜索願を出してきましょう。お母さんと高橋先生はここで待っててもらうことにしましょう。私たちの留守中、もしも悟が帰ってきたら、警察に電話をかけて下さい。これは高橋先生に掛けてもらった方が良いでしょう。
お父さん、警察に届けるのに必要になりますから、悟のなるべく最近の写真を用意してください。全体の雰囲気分かるものと顔がはっきり区別できそうな写真。それから、家出をした時の服装や荷物の状況がわかるものはあるでしょうか」

「俺わかるよ」声を上げたのは次郎でした。
次郎はチラシの裏に悟の持ち出したものや家出時に着ていたであろう着衣に至るまで書き付けたものを君代に渡しました。

「弟さんだね。今年の春にうちに入学だね。少し早いけど挨拶しようか」さすが学年主

任・生活指導担当教諭のベテランどころです。

「名前を覚えてくれるかな。私は三島恭一です。こちらは……」

「高橋峰子です。悟君の担任です」

「松本次郎です。悟の弟です」

「しっかりした弟さんですねお父さんお母さん。では次郎君。君の作った悟の資料借りて行きますね。写真は……これだけあれば大丈夫でしょう。悟は、髪も染めてませんでしたね。オキシドールで脱色？ まあ、問題ないでしょう。パーマはかけてませんね」

「はい。大丈夫です」と高橋が応える。

「ではお父さん行きましょうか」と告げると玄関へと出て行きました。

外は深深と雪が降り続いています。

あとを追って出たのは高橋峰子でした。

「三島先生、お手数をお掛けします。どうか宜しくお願いします」と告げると三島は片手を上げて合図をすると車に乗り込みました。

……さとり……

悟…… 駄目だよお前

家出？

苦しんでたってのかい

平気な顔をしてたじゃないか

お前はいつでもそうだった

私にみせるお前の顔は

いつも優しく笑ってた

笛…… アルトリコーダーは下手だったよ

画は上手だと三島先生が云っていた

国語は読解力に非凡な才がみられるってさ

あんた詩を書いてたんだってね

小説も書いてたらしいじゃないか

上手いなあと思ったのは

生徒が書いた短歌の大会

お前優秀賞で掲載されてたじゃないか

北風と 共に暮らして はや八年

石狩川も 我がものとして

…… 帰っておいで悟。

悟の担任教諭の高橋峰子の驚きと落胆ぶり。
心配のし様は母親の君代に負けず劣らずのものだったようです。
これ以降。
毎夜学校の仕事が終わると悟の家を訪ねては遅くまで君代と言葉を重ねていました。それは七晩続いたようです。

そのころ悟は青函連絡船の中に身を預けていました。
気分だけは何やら一丁前。家族の心配を他所に呑気なものです。
演歌歌手にでもなったつもりでいたのでしょうか。連絡船のデッキに出ると「函館の女(ひと)」を口ずさんでいました。
随分寒い夜でした。函館駅裏の青函連絡船の発着港はオレンジ色の高覧式照明に映し出されています。雪が斜めに降りつけていました。
鴉でさえ時(ねぐら)に帰っているのでしょうか。一羽も見かけることはありませんでした。この当時の函館の鴉は空を飛ぶ姿より陸を飛び回る姿が多く目につきました。港町ですから死んだ魚や残飯が港のあちこちに散逸していましたから。

オレンジに照らし出される雪たちが幻想的でもありました。

様々な出会いと別れの舞台の町となった函館。なかでも青函連絡船が人々に齎す旅愁は他に代えがたい存在でもありました。それも昭和六十三(千九百八十八)年三月を境に廃止。関東・東北地方から北海道民の悲願でもあった青函トンネルが開通したのでした。後に旅行会社の添乗員として勤めるようになった悟。
青函連絡船廃止メモリアルツアーでは随分この船に乗ったようです。

それは懐かしかったでしょう。感慨も一入だったようです。先を急ぐことといたしましよう。

目が覚めると連絡船は青森港に入港するところでした。悟はデッキに出ると青森の町を眺め見ました。
寂しい町だと感じたようです。

なまらさむいっぺよ

函館よりしばれんでねえの
何時よと時計みる
三時半……
まだ夜明けまではだいぶある
朝にならなきゃ列車も出ねえ
あんだってせぼどうするべ
腹も減ってきたシタツケどうする

「おにいちゃん〜ほり、ぼちぼち港さへるから〜下さおりてけろ。デッキさシバレテっ
から滑るはんで、気いつけてな」
どうやら船に乗ってる甲板作業員か港湾作業員なのでしょう。
接岸の模様に眺めていた悟に声をかけてきました。
津軽弁なのでしょう。些か聞き取りにくいイントネーションでした。

悟は石狩という札幌の隣町に住んでいました。
ただ父親の隆が函館の湯川町出身でしたから浜言葉の訛りが強い地域。知らぬ間に津軽
弁も理解できるようにはなっていました。

船が青森港に着岸し乗客が降り始めたのは四時でした。
さすがにこの時間だからでしょう。
乗客は多くはありませんでした。
乗下船ターミナルも閑散としていました。
本州へと向かうトラックをはじめとする貨物輸送車両が大半だからなのでしょう。時期
的にも観光客で混雑する季節ではありません。
何気なく発着便の時刻表が目に入ります。
「次の函館便は六時か……」
実はこの時すでに悟は怖くなっていたのです。
青函連絡船に乗り青森へと着いたは良いもののここから先に不安を感じていました。
「東京かぁ……」
待合室の椅子に座り財布を取り出し確認します。
財布には既に五万一千円しか入っていません。
「五万じゃ、東京についたら四万だ。これじゃぁ直ぐに路頭に迷う。どうしたものか……」



少年白黒.jpg

鷗鳴く海こえてみて
今更気付く
浮世のからさ
血気(けっき)はしりて
こうかいに溺れる
さてどうすると
思案に暮れて
海眺めても
ええ考えは浮かばじ
乗って帰って浮かぶ……瀬もあ……り

「あんちゃん、おめさ、こったら寒いところで何してるべよ～駄目だはんで、風邪こひくべよ。“なあ”どこさ行くってな。おめさあれだんべ、船こさのって来てたっきゃさ。」

悟は待合室から外に出て船の停泊する岸壁に来ていたのです。
幸い雪はやんでいました。暗いながらも明かりも灯っていました。
待合室にいたところで考えは同じところをグルグル回るだけでした。
悟は岸壁の係留柱（ビット）に腰かけながら詩を編んでいたのです。

それは些か面妖な塩梅と映ったことでしょう。
悟に声をかけてきたのは船の中で声をかけてきた甲板作業員でした。
悟は少し間を置くと「東京行きの列車まで時間があるから時間つぶし～」と答えました。
それはそうでしょう。函館行きの連絡船を待っているとは云えませんが。
「な～に東京さいぐってな。な～しにいぐってよ。わりいこといわねっから、帰れエ、帰れエ函館さ。」
どうやらあっという間に家出とバレていたようです。

「なして出て来たかしらねっけど～おめ、こっから先まってんの地獄しかねえど。今までよんり、ヤバイ地獄しかねっから。取り敢えず帰れ。いっか、あんちゃんが函館行きの切符買ったら、“わぁ”はなんも見なかったことにするはんで。したっきゃあいだよ。あんちゃんがもしも切符買わねかったら、“わぁ”、交番さいくど……そいで、“なあ”がこまんねちゅうならすきにすれ」
悟は少し考えた後口を開きました。

「おじさん。煙草一本ください」と。

「どんだっきゃさあ、このボンズ」というと甲板作業員はハイライトを一本抜きだすと
悟に渡し火をつけてくれました。

悟がはじめて味わった人世の情け
イッチョ前を気取ってみても
海の前では屁のツッパリ
縁は異なるもの味なもの
乗りかかった船でも降りてなんぼ

ハイライト
いぶす煙に
浮世が染みて
目にもしみたか
航路吹く風

「切符さ買うんだべな……」
「はい。」

Day 2

Day 2

Day 2

「もしもし、母さん？ 私、君代。チョット悟のことで相談があるから、今日小樽に行くので……うん。そっちに行ってから話します。誰か来る予定あったかい？…… あゝそうかい。うん。そしたら後で。」

二日目の朝。君代は小樽の実家に電話をいれました。
経済的な問題もあったのでしょう。
悟を探すにしても何かがあったときに直ぐに動けるようにしておかなければなりません。
経済的な問題は小さくありません。

幸い今日は日曜日でした。次郎が家の留守番をしてくれます。
君代は隆と二人で小樽の実家に相談に行くことにしました。
君代の実家は西大寺家という小樽どころか北海道でも名の知れた歯科医の家筋でした。
君代はそこの長女です。

しかし君代と松本隆との結婚には最初から西大寺の家では反対でした。それは隆の非嫡出子という出自であり結婚当初はバンドマンのドラム叩きという氏素性の不確かさに起因していたのです。

拳句が悟は西大寺家の男系一番孫。初孫でした。
これが西大寺にとってはオモシロくなかったのです。

小樽潮陵高校を主席卒業。北大医学部主席入学そして卒業という輝かしいキャリアを持つ北海道でも知られた外科医の長男がいるにも拘わらず。
一番孫の父親は非嫡出子のバンドマンという家筋。
拳句が再婚ときていましたから西大寺。特に千代の心中は穏やかではなかったのです。

「父さん、ほれ、なんだか君代が今から来るってさ。松本も一緒に来るって云ってましたよ。なんだか悟のことで相談があるとか。」
「なんだ。悟がどうかしたのか。悟はまだ中学生だったな。」

「はい。確か二年生だったはずですよ。」

「じゃあ進学の話とかいうわけではないな。私は今日は予定を入れていたから、お前が話を聞いてやりなさい。」

「予定？ 予定って、父さんまさか、またあの女のところへ行くのじゃないでしょうね。」

「何を朝から馬鹿なことを云っている。歯科医師会の集まりだ。」

「歯科医師会、歯科医師会ってなんでもそれで片付けて。父さんとあの女のことだって、元々は歯科医師会を出汁に使って露見したことじゃありませんか。」

「うるさい！ 兎に角そういうことだ。」

どうやらここはここで悶着の種を抱えていたようです。

外から見ていただけではわかりません。

千代も大概のことは目を瞑ってきました。

ただ巖が入れあげたあの女のことだけは別でした。

千代が二人の関係を知ることになるや否やその女はことある毎に巖と自分の関係を吹聴して歩いていたのです。

家を守ろうとすれば女をつくる。

子を守ろうとすればゴクツブシと結婚する。

後継ぎを考えれば一番孫は非嫡出子の子供。

思うように行きませんでした。

「悟のことで相談で……」

どうやら千代の中では嫌な予感がしていたようです。困窮しての相談事であればこれまで何度もありました。また始まった。今度はなんと多寡を括ることも出来ました。ですが今回は「悟」のことでした。



午前十時過ぎに函館港に戻った悟が最初に取り掛かったことは罫探しでした。

「取り敢えず、今日から三泊で旅館を探そう。予算は一泊四千円まで。朝食付きだ。安い晩ごはんが食べられる場所がいいだろう。」

悟の手持ちはこの時点で四万八千円でした。三泊したとして一万二千円が消し飛びます。

昼夜合わせて食事代千五百円。四日間で六千円。合計一万八千円です。

「まだ三万円残るか。よし。これに手をつけないうちに仕事をみつけよう。出来れば住み込みか寮があるような職場がいい。」

計画は緻密でした。計画通り行けばなのですが。

函館まで戻ってくる青函連絡船の中で例の甲板作業員のおじさんに朝食をご馳走してもらいました。煙草も二本貰いました。

さすがに一緒にいるところで吸うのは具合が悪いということで悟はデッキに出て吸いました。

連絡船の売店でも煙草が売られていました。

悟は悩んだ挙句ハイライトを三箱買いマッチも一つ買いました。

連絡船を降りしな甲板作業員のおじさんを見つけると駆け寄り上着のポケットに煙草二箱をねじ込みました。

おじさんはポケットに手を入れるや何も言わずに笑っていました。

「ごはんごちそうさまでした」

「なんもだ。ちゃんと、うちさけえれよ」

二人の会話はそれだけでした。

悟は函館駅に向かうと待合室に席を陣取り詩編ノートを取り出しました。どうやら家出日記を書くことを思いついたようです。

名前を聞いても教えてくれず
訛りがきつくてわけわからず
何度も何度も聞き直し
まるで言葉の通じない
外国人と話してみたい
なあと呼ぶのは相手のこと
わぁと呼ぶのは自分のこと
ややコシイたらありゃしない
なにが喰いたい何でも喰えや
腹がへったら思い出す

なあのかっちゃんの飯のこと
「なあ」ごめんよ。俺……
帰らないよ
名前の知らない甲板員のおじさんへ

母音律「あ」の詩
昭和五十二年二月〇〇日 十一時四十三分 函館駅で

悟は得意の早文字でノートに詩編を紡ぎました。
顔を上げた悟の前には駅中の「旅館案内」の文字が読めました。

「すみません。今日から三泊できる旅館を探してます。予算は朝食付きで四千円までなんですけどありますか……」
「何名様でご利用でしょう……」
「一人です。」
「お兄さん一人ですか？ 保護者さんとかは……」
「いませんよ。函館ラサールの推薦入学の面接試験を受けに来たついでに泊まるだけですから」
なんという子供でしょう。云うに事欠いて名門函館ラサールを持ち出しました。この辺りが悟の心臓です。

元来社交性に富んだ子供でしたからお喋りは得意。
なにしろ三歳児のときに家に訪ねてきた飛び込みのセールスマンを羊羹とお茶で持て成し座を繋いだという逸話を持つ子供です。
地元民に函館ラサールを知らぬものなど居ませんでしたからそのご威光をお借りしたようです。
案の定と申しましょうか。
旅館案内所の受付係の態度も急変。
「では、駅を出て右手に百メートル歩いた右側の虎屋旅館は如何でしょう。朝食付きで三千六百円の和室ですが」となりました。
「そちらで結構です……チェックインの時に三泊分お支払いすれば良いですね」
「その旨旅館に連絡を入れますからここで暫くお待ちください」

程なく先方の了解を取り付けた受付係は予約確認書を悟に渡しました。
「煙草が吸いたい。腹も減った。旅館代が千二百円浮いたのか。じゃあ折角函館に居る

のだから烏賊刺し定食でも頂きますかね」と。
何処まで行っても楽天的な子供でした。

■

「ほれみなさい！ 言わんこっちゃないでしょ。親がそうしてだらしないから子供まで見てみなさい！」

君代と隆は小樽の君代の実家西大寺の家がありました。

君代が母親である千代に仔細を報告するや否や烈火のごとく言葉を浴びせました。

「はい。申し訳ありません。」口を開いたのは隆でした。

「それで、どうなっているのさ。」

「警察に届け出を出し搜索願も出しています。ただ今のところ目ぼしい情報もなく、各地の警察署に搜索用の写真を配布するというこのようで……」

「情けない。西大寺の孫が警察のご厄介？ 君代、あんたどうするつもりでいるのさ。悟に万が一のことであったら。あの子は西大寺の一番孫、初孫なんだよ。あんた達だけの問題じゃないことは分っているんだろうね。」

千代は次第に自分の声に興奮を隠しきれなくなっていたようです。

【こんな時ばかり西大寺、西大寺、一番孫、初孫って散々憎まれ口叩いてきたくせに。何を云ってけつかる】君代は頭の中で呟きました。

「ごもっともです。悟の学校の先生達も随分心配してくれてます。手分けして出来るだけのことをしてくれるという言葉も頂いてます。どうか過度なご心配はいただきませんよう。」隆は千代にそう告げました

■第三話につづく■

「もしもし、西大寺です。あら、まあまあご無沙汰しております。木村先生にはいつもお世話になっておまして。え～え、え～え～そうですそうです。今日もなんだか歯科医師会の会合があると云って出て行きました。え～っ、あらそうですか。ええ、ええ……ニューギンで？ うちの先生がですか？ 見間違いではなく？ はい。え～ これはご丁寧にお知らせを頂戴しまして～。うちの先生も、北海道歯科医師会の副会長を務めるようになって、なんだか世間が狭くなってきたなんて云ってますから。人様から誤解を受けるような行動は慎むように言うことにしましょう。何を仰いますやら～ 木村先生の奥様のお心遣いにはいつも感心させられております。はい～。ええ～ では、ごめん下さい。」

ただ事ではありません。茶の間の焼けたストーブのように千代が顔を真っ赤にしています。

君代には大方の想像がついたようです。

君代が考えたこと……。

それはこの後しなければならない金策に影響を与えないことが前提でした。

【ここでご機嫌を損ねては何の得にもならない。ここは肩を持ってやるのが得策……】と。

「母さん、木村先生の奥さんからの電話なの？ あの耳年間がなんだって？」

隆がいるせいでしょう。千代の口は重たいようです。

「ちょっとあなた、ガソリンいれなきゃって云ってたじゃないの。いってらっしゃいよ。今日は日曜日だから開いてるお店は当番店だけでしょ。」

「そうだな。チョット行ってくる」

この辺りは松本夫婦よくしたもので阿吽の呼吸でした。

隆はサッと席を立ち出かけてゆきました。

「で……どうしたのよう。そんなに怒ってェ。」

「……女とニューギンで買い物してたんだとさ、父さんが。それを木村の奥さんが見たんだと。何をしているんだか。脇が甘いのよ大体において。」

「女って、例の女のこと？」

「そうでしょう。」

「でも、父さんもいい加減にしなきゃだわね。北海道歯科医師会の副会長になって責任も重くなっているでしょう？ 人の眼はうるさいわよ～。大体面白おかしく尾鰭がつくものでしょう？」

「ダメなのよ。私が云っても聞きゃしない。よっぽど“高島”まで乗り込んでやろうかと思っただけだけど……」

君代の中では「高島」という言葉が存在感を大きくしてゆきました。

【ははぁ～ これはやり様によっては……】と。

「駄目よ。母さんが直接相手のところに乗り込んだら、足元を見られるだけでしょう。かと云って、逆上(のぼ)せあがっている父さんに別れろと云っても聞く耳は持たないでしょう？ 母さんが直接行って何かをしたり云ったりしたら、世間体も悪い……」

「そうなのよ。だから腹が立つけど我慢もしてるのだけどね。」

「もう随分と長いこと我慢しているじゃないの……」

「……」

「まあ、今日の木村先生の奥さんからの電話のことは、父さんには内緒にしておきましょう。後々動きにくくなっても困るでしょう。」

「そうだねえ。」

「で、母さんは、手切れ金どの程度考えているの？」

「……そうだねえ……やっぱりいるんだろうね。手切れ金。」

「そりゃあそうよ。相手は後家さんでしょ？ 歳もいってる。ここでタダで放り出されることなど考えるものですか。」

「……そうだねえ……」

君代は頭の回転の速い人間でした。

子供の頃から大人の会話をサラッと紡いでみたり拾ってみたりバッサリ切り崩してみたり。

「お前は女にしておくのが惜しい。男に生まれて政治家にでもなればよかったのに……」
そう云われる子供でした。

ガソリンをいれに行っていた隆が戻ったようです。

「あなた。高橋先生もいらっしゃるから帰るわよ。車で待っててちょうだい。」

「じゃあ、そういうことで、チョット“赫子”とも考えてみるから任せてちょうだい。」

「そうかい。じゃあ頼んだよ。」

「ところで、云いにくいんだけど十五万ほど都合してください。悟のことで予想外のお金が出そうなので困っています。」

「仕方がないねえまったく……悟のことで何か分かったらすぐに連絡するんだよ。父さんには私から云っておくから……」

千代はそう云うとお仏壇からお金を出して君代に渡してやりました。



雪景色 2 .jpg

「はい。いらっしやいませ。松本様ですね。ええ～ええ～ご予約頂戴しております。どうぞおあがりください。せば、係にお部屋まで案内させますので、宿帳にご住所と連絡

先、お名前のご記入を……はい。ここですね。」

旅館案内所の予約確認書を出すまでもなく。

虎屋の女将さんの受付は淀みの無いものでした。

悟は住所を親戚の赫子叔母さんのものを書きました。電話番号も赫子のものを書きました。この辺りは妙に馬鹿正直なところも窺えます。

部屋は八畳の和室。テレビと冷蔵庫と鏡台に文机が設えられ部屋の真ん中には大きな机。その上にお茶のセットと茶菓子が一つ。

一人で旅館などに泊まったことの無い悟にとってはどれもが新鮮であり大人の世界を垣間見た気分に入るに十分だったようです。

「履歴書かぁ。仕事を探すには履歴書がいるのだな。明日でも買ってくるでしょうか。」

文机を見た悟が一番最初に考えたことが履歴書のことでした。

大きな机の上には灰皿とマッチもありました。

悟は窓を開け放ちます。

雪が降りはじめていました。

窓の外には港に停泊する大小様々な船が見えました。

灰皿を持ち窓辺へ腰かけるとハイライトに火をつけました。

だいぶハイライトの強さに慣れて来たようです。

親の煙草を盗んで吸ってはいたものの両親が吸ってた銘柄はセブンスターでした。やはり幾分軽かったようで初めておじさんに貰ったハイライトを吸ったときには噓せこんでしまいました。

灰皿で火を揉み消した悟は窓を閉め文机の前に座ります。

鞆から詩編ノートを取り出します。

お財布から凡てのお金を出しました。

「ゆれる…… 三万円。ゆれるたわわ……六千円。ゆれるたわわ……六百円。ゆれるたわわなちぶ…… 九十円」

小学校の四年生の時に悟が身に付けたお金の数え方でした。

「ゆれるたわわなちぶさ」

当時の悟は読めない漢字ばかりに支配された小説を読むことが好きでした。

まるで暗号を解読しているような気持ちになっていたようです。

辞書とノートは肌身離さずの毎日でした。

「三万六千六百九十円」宿賃を前払いし烏賊刺し定食を食べた悟の全財産でした。
詩編ノートに書き記します。

三万六千六百九十 数えるたびに減ってゆく
いつまでもつか 知るまでもなく
喰うこと詰めつつ 飢えしのぎ
ねぐらしのいで 寝起きする
凍える冬を 呪いながむる

母音律「ああ～おお」の詩
昭和五十二年二月〇〇日 十五時五十五分

「風呂に入れるのだな。風呂へ行こう」
悟は詩編を一つ編むと風呂に入りに行きました。

ただ～。
悟はここで大きな失敗をしてしまっていたのです。それは「灰皿」の後始末のことでした。
人の世というものは生きていますと何時何処で誰からの恨み妬み嫉みを買うか分かったものではありません。
それもこれも人生勉強です。

ただ十四歳の悟にとっては些か荷が勝ち過ぎた勉強かもしれません。
布団を敷きに来た部屋付きの係が机の上の灰皿にある煙草をみつけてしまいました。

「女将さん、あの一人泊まりのお兄ちゃんて、お受験の宿泊でしたねえ～お部屋の灰皿にこれが……」
「あのハンカクサイ者、煙草なんか吸ってるてのかい？」
「みたいですなぁ～、どうしましょう。お部屋の灰皿外しておきましょうか。」
「…… そうだねえ。今、お風呂だろ？ この灰皿、元のところに戻しておいて頂戴。この

ままだよ。有ったところにそのままに。換えたら駄目だよ。新しいものに……」

如何やらこの女将もドロドロした何かを抱えていたようです。

Day 3

Day 3

Day 3

「松本さんおはようございます。はいお食事はこちらの席でご用意してます。夕べは眠れましたか？」

虎屋の女将は夕べの煙草のことを仄めかすことはありませんでした。

悟はパジャマ代わりのスエットのまま朝食テーブルに着きました。

「はい。ぐっすり眠れました。……これが朝ごはんですか？ すごいですね、朝から烏賊のお刺身がつくんですか。」

「函館の名物ですからねえ～塩辛も自家製ですから食べてくださいね。」女将は茶碗にごはんをよそうと悟に手渡しました。

「今日はこれからどちらかお出かけですか？」

「……もう一度、学校へいかなければならなくて……あとはそれから考えます。」

「せば丁度良かった、お握りを握っておいたから持っていけばいっしょ。二つ握っておいたから持ってきて下さい。」

悟にとっては好都合でした。これで一食分浮かせることができました。

それにしてもこの女将。何を考えているのでしょうか。

この日の悟の予定は履歴書づくりから始める予定でした。

昨日の夕方に食事に出かけた際に見つけた文房具屋で履歴書を買ってきていました。それを午前中に書き上げ午後から手当たり次第に面接に行こうと決めていたようです。

どうやら悟の計画では「蕎麦屋、すし屋、魚屋、市場」から中りをつけて行こうという計画だったようです。

「昼から出かける予定だったのにチョット予定が狂ったけど、まあいいか。喫茶店にでも入って書くでしょう。」

この時の悟は自分に搜索願が出ているなど考えもしませんでした。

西大寺の家では巖の弟たちに悟の家出のことが知らされてました。中でも巖の一番下の弟は函館の信用金庫勤め。

「君代のところの悟を覚えているか？ あゝ、なんでも家出したらしいから、まあ、無いとは思いますが、もしもそっちに立ち回ったら知らせてほしい」と電話していました。

朝から君代のところにも親戚兄弟姉妹からの電話が鳴りっぱなしです。そこへ妹の赫子から電話が入りました。

「お姉さん？ なに、悟どうしたってさ、母さんに聞いてびっくりしたべさ。なんで……どこ行ったのさ、この真冬に。」

「朝からさ、兄さんそこから電話は来るわ、ほれ父さんこの弟の正次おじさんから電話は来るわ。大変だって。土曜日の明け方出てったみたいだあ〜なんもさ、もう、わやだ。」

「してわ、まだみつからないのかい？」

赫子は西大寺の君代の兄弟姉妹の中もっとも悟を可愛がりました。

赫子が独身の時には月に一度二度悟の顔を見に行くのを楽しみにしていたぐらいです。

君代と悟の話しをしていると知らぬうち涙が出てきていたようです。

「赫子、母さん他になんか云ってたかい？」

「なんもさ。悟のことで君代が困ってるから協力してやんなさいって。時間あったら、姉さんのところに行ってやりなさいって云ってただけさ。」

千代はこの機に乗じて君代と赫子を繋いでサッサと作戦を練らせようという腹だったようです。

「赫子、あんた今日時間ある？」

「そうそう。時間は大丈夫だと姉さん、わたしの知り合いの八卦置きの所に行こう。一緒に。有名な八卦置きでね、凄く当たる人だから、悟がどこに居て、いつ帰ってくるか見てもらおう。」

赫子は君代に占い師の所に行くことを勧めました。

君代も事が事。時が時だけに占い師の言葉でも頼りたいところだったようです。赫子と待ち合わせの時間を決めると電話を置きました。

当たるも八卦当たらぬも八卦易占頼って我が子をさがして
いっそ藁でも掴みたくイワシの頭もなんとやら親の心
すべからく子知らず思うてみても涙枯れる暇もあらずなり
縁(えにし)手繰りて問うてはみても顔も背丈も覚えは目出度くなく
これも親の奠とするも無駄とはおもても不動の山に為れず

自由律短歌 母音律「あ～お 順」

第四話につづく



君代と赫子の二人は札幌の狸小路五丁目にある八卦置き(占い)のお店にありました。どうやら赫子のご最良の占い師なのでしょう。仔細にわたり説明するのは赫子の役目でした。

「お姉さん、悟の生年月日といなくなった日をこの紙に書いてちょうだい～服装も分かった方が良いんでしょうか？」

「わかることだけで良いですから。それから、お母さんとお父さんの生年月日も書いてもらえるべか……。」

君代はいつになく緊張していたようです。自分の子供が家出をしこの寒空の下どうすることも出来ずに八卦置きを頼らなければならないのです。それは緊張もし腹立たしい思いも募ったことでしょう。

君代があらかた書き終わると易者が筮筒から筮竹を抜き出しジャラジャラとやりはじめました。

五十本の筮竹から一本の太極と呼ばれる易神竹を抜き出すと筮筒に立てていました。ジャラジャラ～パチン。ジャラジャラパチン……黒檀でできた算木でしょう。

抜き出した筮竹にあわせ算木を並べ始めました。

「……南だべね。北海道からは離れてないね。……なんもだ〜大丈夫だ。生きてっから、余計なことは心配しなくていっから。」

易者は君代の手を取りながら言葉を続けます。

「いっかいお母さん、この子は帰ってくるから心配ないから。十日以内だね。なに、今日で三日目かい、せば、あと一週間以内に帰ってくるんでねえの。帰って来た時に怒ったらだみだよ。原因はあんたたちが一番よく分かってることだべし？ この子はちゃんと勉強して帰ってくるから心配しなくて大丈夫。……それからね、これは赫子さんも関係あんだべね。ご実家のゴタゴタはお姉さんと相談して進めて大丈夫。」

君代も赫子も小樽の実家については一言も触れていませんでした。

君代にするなら「我が意を得たり」だったことでしょう。赫子にしても父親が後家さんに入れあげていることは旧知の事実。電話で君代から「母さん他に何か云っていなかった？」と聞かれた時点でそんなところだろうとは予想もしていたようです。

二人は易者の店をあとにすると狸小路六丁目裏にある喫茶店「沙羅」で向き合いコーヒーを飲んでいました。

「お姉さん、良かったべさ。ちゃんと帰ってくるって云ってもらえて。大丈夫だあ、あの人ほんとに当たるから。有名な易者だから。」

「まあねえ〜あれだけハッキリと生きてるから、十日以内で帰ってくるからって云えるんだから自信あるんだべさ……ところでさ赫子。小樽に帰ったときにね、父さんの例の女の件で……木村先生のところの奥さんに見られちゃったらしいのよ。」

「誰がさ… 父さんがかい？ 何処でさ？ ニューギンで？ 何やってんのさ、はんかくさいんでないのかい。いやあ〜腹立つ。やっぱりあの時に敏子と二人でぶっ殺しておくんだったわ。なして、そうやって……」

「……それでさ、母さんとチョット話をしてさ、どうするか赫子と相談するからちょっと待ちなさいって止めたわけよ……それでね……」

チョット物騒な話しが飛び出してきました。

何を隠そう赫子はその昔まだ高校二年生の頃に父親の巖を殺してやろうと思い立ち実行に移したことがあったのです。余りにも理不尽な父親の態度。外に女をこさえ母親に苦しい思いをさせる巖の不条理な態度に我慢がならなかったようです。

草木も眠る丑三つ時。父母の寢床には末娘である妹の敏子が一緒に寝ていました。赫

子は抜き足差し足で寢床に向かうと敏子が飛ばした枕を拾い巖の顔の口元めがけて塞ぎ込みました。

どうやら力が緩かったのでしょう。巖は目を覚まし抵抗をみせたようです。

「敏子！ 手伝いなさい！ 父さんぶっ殺してやるから、手伝いなさい。」

赫子は自分の力が足りないと考えたのでしょう。敏子の応援を求めたのですが驚いた敏子は加勢するどころではなかったようです。

そのうち形勢は目に見えて赫子の不利。

「ヤバイ」とみるや赫子は枕から手を放し大声を上げて泣き出してしまいました。

夜中のことです。大声で泣き始めた妹を心配した男兄弟たちが二階から「何事か」と降りてきました。

巖は「上に連れていけ」と一言告げた切り何も言うことはありませんでした。ただこの日を境に巖の千代に対する態度は柔らかなものとなったようです。

赫子の謀反は失敗に終わりました。

でも結果的には父親からの責めも受けることも無く平穏な日々を送った赫子の功績は小さくは無かったようです。

男兄弟たちからの覚えも随分と目出度くなったのですから。



「外の募集の張り紙見て来たんですけど。まだ募集してますか？」

「してるけど……………保証人いるどうちの店」

いきなりでした。一件目の蕎麦屋からすし屋～ 凡て保証人の声です。

昼の忙しい時間を避けて片っ端から張り紙のあるお店を廻ってはみたものの履歴書を出すまでに至ったお店はありませんでした。

流石に悟も落ち込みました。ただ落ち込んでばかりいる暇はありませんでした。悟は棒二守屋という百貨店に行くとワイシャツとネクタイを買いました。五千円ほどの予想外の出費です。

履歴書上では十八歳ということにしていたようです。ただどうしても幼く見えたのでしょう。履歴書を出すところまで行かぬようでは話にもならないことは明らかでした。

「取り敢えず、今日は旅館に帰って作戦を練り直しだなあ。ワイシャツとネクタイで少

しは大人っぽく見えるだろう。」

悟のお財布の中の残金は三万一千二百二十円まで減っていました。

「お金も少なくなってきたなあ。予定外のものにお金を遣っちゃったからなあ……晩ごはんも食べなきゃだし……少し早いけどここでご飯を食べちゃおう。」

悟は棒二守屋の地下で焼きそばを食べると夜食用に菓子パンを二つ買いました。

これで残金は三万二百四十円になりました。

外はもう日が暮れていました。

雪が降っていました。

港に停泊している船でしょうか。

霧笛が一度鳴りました。

「煙草が吸いたいなあ……」

「面接も上手くいかない子供が煙草……」

「チョット不味いよなあ。外で吸うのは。」

そんなことを考えているとバスが走ってきました。

「函館山バス停行き……かぁ……行ってみようか。」

悟は偶然目にしたバスに飛び乗りました。

世界三大夜景のひとつと云われる函館山の夜景です。

冬だというのに人がたくさん乗っていました。

皆家族連れでした。

悟はそんな乗客たちを見ていられなかったようです。

皆楽しそうにお喋りをしています。

やはり子供だったのでしょう。

カップルやアベックを見ても何も感じることは無かったようです。

ただ家族連れを見ると苦しくなったのでしょう。

「何してるだろう。今頃。心配してるだろうなあ……」と。

バスは函館元町を過ぎると函館山登山道を上りはじめました。

九十九折の山道を登ってゆきます。

「立待岬もバスで行けるのか……」バスの中吊り路線案内図を見ると周辺観光地へのバ

スルートの案内が表示されていました。

程なくするとバスは駐車場へと滑り込んでゆきました。悟は帰りのバス時刻を確認すると展望台へと歩みを進めます。

まだ雪は降っていました。冷え込んでいるせいでしょう。雪はサラサラとしたものでした。

「なまら寒いっけよ……」

眼前に広がる函館山からの夜景は美しいものでした。降る雪がチラチラと街灯りを受けて煌めきます。

悟は観光客たちから距離を取ると煙草を二本吸いました。

連絡船が港を後にするようです。

「甲板員のおじさんは乗っているのだろうか……」煙草を吸いながら考えました。

夜景を見ていると脳裏には昼間の面接シーンが何度も何度も浮かんでは消えを繰り返しました。

「仕事決まるんだろうか……」

この瞬間です。

十四歳の少年が生まれてはじめて「死」というものを間近に感じた瞬間となったようです。

バスの中で見た「立待岬」という言葉が妙に近く感じられました。

「あらあらあら～ 寒かったしょ。早くなかさ入って……お風呂さ入ってしっかり温まんないば風邪ひくんだよ」

函館山を下りると旅館のすぐそばにバスターミナルがありました。

「けっこう降ってきましたね雪……」

「したからさぁ～ お風呂さ入って温まってこないば～」

まるで母親のように感じられました。

「いやぁ～、お兄ちゃん、晩ごはんは食べたのかい？ なんか作るかい？」

「棒二守屋で食べたから大丈夫です。菓子パンも買ってきたし」

そう言うとき悟は部屋のカギを受けると部屋へと上がってゆきました。なにか妙に人と話をしたくない気分だったようです。多分、優しさに触れることが怖かったのかもしれません。

生まれてはじめて「死」というものを間近に感じた子供にとって。触れる人の優しは意思をくじくには十分足り得たのではないのでしょうか。

部屋に入ってテレビをつけると君代が好きで見ていたドラマが流れていました。
「見ているんだろうか……風呂さいくか」
そう呟くと悟は部屋の明かりを常夜灯まで落としました。

Day 4につづく

ご案内。「開く閉じる」に一貫性が見られぬところが多く見受けられますが
最終更新の後にて調整する所存です。どうか、不出来をご笑読頂ければ幸いです。
また使用する漢字について、例えば……言うと云うなどに揺れであり一貫性が無いところも散見されます。これも後ほど手を入れます。

Day 4

Day 4

Day 4

悟が五万六千円を握りしめて石狩の家を飛び出してから四日目の朝を迎えました。
旅館の自室の窓を開け放つと外は吹雪でした。
夜明け前から除雪車が函館駅前を行ったり来たりしていました。

斜めに銜えたハイライト
マッチ擦りて炎をつける
窓辺乗りだし雪うけて
まどろみ眼に雪しみる
風にあおられ暁カモメ
体風上むけただよ
滑空波乗り自由自在
あんたはいいよ自由でさ
だってあんたは家いらず
食べ物だって困りゃしない
勘定する金必要ない
かもめさんあんたは鳥でよかったよ

悟は煙草を吸いながら詩をひと編みしました。

「今日も元気だ煙草がうまい〜ってかぁ……」
イカレた十四歳でした。

灰皿は取り換えられることも無く五六本の吸い殻が溜まっていました。

ホテルや旅館になど一人で逗留したことの無い子供です。
灰皿が毎日替えられるものなどとは考えもしませんでした。
ここで一寸でも「不思議だなぁ〜」と思えれば……。

「ぶうれえ…… 二万円
ぶうれるうらあわわなりいぶう…… 九千円
…………… 二万九千六百三十円か……」
悟は銜え煙草のまま心許なくなってきたお金を数えました。

同時に一つの問題に直面していたようです。
「明日の朝にはチェックアウトしなきゃならないのだなぁ」と。
今日中に仕事が決まり運よく寮に入ることができれば良いでしょう。でも昨日の面接を
経験した限りにおいてはけして楽観できるものではありませんでした。
悟の中では不安が次第に現実感を伴い大きく育っていました。
そのせいでしょう。

「今日は火曜日……母ちゃんは、はん場のご飯炊きは休みだなぁ〜今日は体育がある日
か……そうだ、峰子はどうしてるだろう。また泣いてるかもしれないなぁ」
少しホームシックと現実からの逃避が首を擡げてきていたようです。
煙草の火を押し潰すように灰皿で消しました。
ただ……まだ気付くには若すぎたのでしょう。
日常の苦悩も逃避して感じる苦悩も表裏。
結局は同じこと。違いは責任が伴うか伴わないか。十四歳の少年には飛び出した外の世
界が要求する責任というものを知るには早すぎたのかもしれません。
「働くに保証人が必要」ということでさえ社会のルール程度にしか考えてはいなかった
ようですから。ただなんとなく「甘くなさそうだ」とは感じはじめていたようです。



「え〜と……はい、皆さん静かにして。松本君と京本君が家を出てから四日経ちます
が、誰かのところに二人から連絡はありませんでしたか？ 班長のところにもない？ そ

う……では、もしも何か心当たりのある人や連絡があったときには先生に直ぐに教えてください。はい、では授業をはじめます。」

担任の高橋峰子は毎晩遅くまで奔走していたようです。

早い時間は京本の自宅へ行き状況の確認。ただ京本の家ではあまり歓迎されなかったようで玄関先で話しをして終わりだったようです。

松本の家に行くと腰が長くなったようで一度食事もして帰ったことがあったようです。

そのころ学校では一つの可能性について協議が重ねられていました。
家を出て帰っていない生徒が二人いたのです。

もう一人は「京本正樹」。俗にいう不良であり問題児でした。
後に京本は禁止薬物の吸引で前後不覚となり救急搬送になっていたことが明らかとなるのです。ただこの時点の学校サイドとしては教育委員会への報告義務もありました。結果それぞれの案件ごとに報告書を出すことにしたようなのですが……。

「松本君と京本君が一緒にいるとは考えられませんか？ 二人の接点はどうでしょう。普段一緒に遊んだりとかは……」

「京本は家庭環境も複雑で、それが原因の一つでもあるのでしょうか。素行に問題も多く、これまでも何度か出奔したり登校拒否をしていましたから、驚くには値せずなのですが……」

生活指導教諭の三島が教育委員会の担当者に向けて説明します。

「松本は、家庭環境的にはごく普通の家で、ただ、生活面での困窮は否めなかったようではあるのですが……クラスの委員や親しかった者たちに話を聞くと、時々煙草を吸いに京本の家に入出入りしていたという話しは出ていますが、所謂、ツレとして何か不良行為であり、問題行動を起こしたことはありません。」

「たばこを吸いに…… ですか…ということは、満更一人ではないかもしれぬ～という可能性も排除できないということになりますね」

教育委員会の担当者は自説を展開してみせました。

三島は「可能性は否定しませんが、別案件として警察へは説明すべきかと～松本の場合は、書置きもありますから計画的な単独の家出かと～まあこれは担任の高橋先生も同じ意見なのですが……」

「松本君の学校生活はどうでしたか～ 委員会などですが……」

「手元の資料では、一年生の時に美化委員と図書委員ですね。二年生になってからは図

書委員と放送委員をしていたようです。共に担当教諭からの問題点の指摘はありませんね……」

【さて、ここで先に拾っておきましょう。京本が家に帰らなくなったのは日曜日の夜からだったようです。その後、月曜日の夜に札幌市二十四軒で暴走族と遊んでいるところを補導されたのですが、その時点で既に禁止薬物の吸引による酩酊状態が重かったことから直ぐに病院搬送、治療措置が取られたようです。京本が酩酊状態から覚め、警察からはじめての取り調べを受けたのは水曜日の朝。悟の家出から五日目の朝のことです。この時点で、学校や京本の自宅にはすぐに連絡が入ったようで、学校側は警察に松本悟と一緒にではないか、松本悟の行動について知っていることの有無を確認したようです。結果、京本からの証言により、松本悟の家出は単独によるものであり、現時点においては事件性はなく、素行の不良によるものと判断しきれず～の見解に至ったようです。京本はこの後に家庭裁判所経由での保護観察処分となりました。】

■

「お姉さん、一つお聞きしたいんですけど……」

「はい、なんでしょう～」

悟は朝食会場への行きしなに旅館の下働きのお姉さんを呼び止めました。

朝の忙しい時間帯。呼び止められたお姉さんは気もそぞろです。

「あと二泊したいのですが、延長は出来ますか？」

「それは、フロントの女将さんでなければ判らないので、私から伝えて後からお返事させてもらいますから。」そう云うとそそくさと走り去ってゆきました。

どうやら悟はあと二泊延泊する気です。

もしも延長が出来なければまた函館駅の旅館案内所で頼もうと思っていたようです。ただ悟にするのなら旅館案内所の従業員が同じ係だった場合不信感を持たれることへの不安が大きかったのでしょう。出来たらこのまま延長できることを願っていました。

さて下働きのお姉さん。早速女将さんに報告に向かいました。

「…… そうかい。延泊したいってかい。どうもおかしいね。あのぐらいの年の子が一人で旅に出ること自体が面妖だろう？ 挙句が延泊…… 普通じゃないね。学校だろ？ まだ。まあ、いいだろう。受けてやりなよ。宿賃は前金で預かるんだよ。……朝食？ だったらお前が行って伝えてやりな。宿賃だけは後でフロントに預けるようにってね。」

虎屋の女将は悟の延泊の申し出を受けました。

ただどうにも釈然としないものを抱えていたようです。

あとで宿帳に書かれた電話番号に電話をかけてみようと思いを纏めたようです。

「はいはい、松本さん聞いてますよ。あと二泊の延泊ですね。うちは大丈夫ですけど、松本さん、学校は大丈夫なの？ お家のご両親は心配しないの？」

「夕べここに帰ってくる前に公衆電話から電話をしておきましたから大丈夫です。進学も決まっていますから学校は、風邪ということにしてずる休みです」

「あらあら～ はいはい。じゃあお婆さんも内緒にしておいてあげましょ」

女将はそういうとお金を預かりました。

無理が滲みます。それでもここは虎屋の女将も商売人。これ以上は深入りしません。それはそうでしょう。後から電話で確認すれば済むことです。それより一部屋でも埋めておくことが旅館のお商売。

みすみす平日の宿泊客を逃すことはしたくはありません。

悟は延泊分の七千二百円をフロントで支払うと自室に戻りました。

すると……

下働きのお姉さんが悟の部屋に入っているではありませんか。

どうやら灰皿を調べていたようです。

悟もここに至ってようやく「マズイ！」と思ったようです。

「掃除ですか？ 今日昼から出かけますから、掃除はいいですよ。それから延長の件は女将さんにお金を払っておきましたので、あと二泊しますね。」

マズイと考えたのはお互い様でした。

下働きのお姉さんは手元を滑らせ灰皿をひっくり返すとあたり一面灰だらけにしてしまいました。

思わず口を突いてでる「灰皿交換しますね～」の言葉。
まァこれが通常のルーティンです。
染み付いた癖というものはついつい顔を覗かせます。
テーブル拭き用の布巾で畳の灰を拭きました。
さー大変です。
煙草の灰は畳の目に入り込むと取れたものではありません。
灰色に染まった畳の面が次第次第に広がります。

やっちゃった
兄ちゃん急に
ヌッと姿見せ
手元くるいて
大慌て
灰皿まかして
気は動転
拭いた布巾は真っ黒で
寝床の畳も真っ黒で
お前恨めし私の顔は真っ赤々

お猿のお尻のように真っ赤に染めた下働きのお姉さんの顔。
それは酷くなった霜焼けのように悟には見えました。

第五話(3)につづく。。。はい。(3)に続きます。
いやぁきつかった。
ようやくここまでやり込めた。これで取り敢えず Day 4 の出口は見えた。
Day 5 までは苦勞しそうだ。
読んで頂けているあなた様。ごめんなさいね4枚ぐらいしか入れられず。

Day 5

Day 5

Day 5

小説『七日 nanoka』

著 飛鳥世一(辻話人〔フル〕)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
